

十年間日本領だったから上流階級の子供は日本語しか分らない。そのため中国軍が入って来てから中国語を習いに行っていました。

昭和二十一年三月まで台湾におりましたが、その間憲兵隊の分隊は四十八名で終わりまで一緒でした。分隊長は大尉で、戦犯にはならなかったのですが、危ないというので帰国は早く、しかも駆逐艦「櫻」に乗り、一日で鹿児島へ上陸しました。

帰国後、憲兵だったためか公民権停止が一カ年ありました。内地へ帰ってから一年以上マラリアで悩まされましたが、富山の薬屋からキニーネを買って飲んでいました。雨の中や水に入るとマラリアが出たので田圃仕事はできませんでした。

その後は農業をしていましたが、現在は子供が継いでくれて、私は老人クラブの幹部をやっています。旧泉村から入営した三人は生きているし、今でも長野県や北海道の戦友などと中隊の戦友会を毎年やっています。

一兵士の従軍記

馬と鳩と共に

愛媛県 金子 国雄

私は愛媛県立西条中学校四年生在校中、満州開拓義勇軍第四次愛媛班班長に応募して学校を中退し、茨城県の内原訓練所（所長は有名な加藤完治さん）へ入所した。時に昭和十三年十一月のこと。次に満州国北安省慶城県の不二訓練所へ移ったのは昭和十四年三月。寒い寒いを耐えて、満州建国、第二の日本を夢見て若い力を傾けつくした。

徴兵検査は昭和十七年六月ハルビンで。第一乙種合格。現役入営は昭和十七年十二月十五日。

その当時の我が家の事を述べると、

父 健在 台湾花蓮港で呉服商

母 死去 （昭和八年十月二十二日）

兄三人 健在 農業、従軍僧、新聞記者

姉三人 全員結婚、他家へ

という状態で何の後顧の憂いもなく入営した。

入営は満州第九十二部隊（騎兵第二十八連隊、ハルビン）岩間隊。居住地の北安省慶城よりハルビンへは列車で約六時間。車内はストーブに薪と石炭の混焼で暖をとる。ハルビンへ着くと、日本人街にある浄土真宗別院へ集合し、馬車（マーチヨ）で立派な孔子廟で有名なチューリンへ。騎兵隊、歩兵隊、陸軍病院がある。辺りは何里もの原野である。

入隊をして初年兵となる。軍馬との共同生活が始まる。馬は今まで見たことはあるが、手を触れるのは初めて、恐ろしくてどうにもならない。逃げるわけにもいかない。馬は利口で新兵をよく知っている。心の中で「何くそ！」と覚悟して、世話をするうちに馬も人の言うこと、することを聞いてくれるようになった。まず、入隊すると被服が支給される。問題は靴である。長靴と自分の足の寸法が一致しないと言うと、「靴に足を合わせろ」と叱られる。無茶苦茶である。

でもどうにか大きさを合わせてくれた。もちろん、良い靴は古兵が抜け目なく先にとり、自分の履いていた悪い靴を員数に入れる。初年兵は何でもすべて悪い物を押し付けられて辛抱させられる。

私に割り当てられた愛馬は「北風号」という牡馬で四歳くらいで、約二年間一緒に生活をした。

隊内生活では、騎兵隊は起床、消灯時刻とも他の兵科より三十分ほど早くて遅い。馬を連れているからである。朝夕の点呼が終わると直ぐ厩へ走る。世話する馬も自分独りの馬だけでない。古兵、上等兵、班長、教官、隊長の馬と一人で数匹の馬をもつ。忙しいことこの上ない。三步以上は常に駆け足である。朝一番に水をやる。次に餌、寝糞出し、馬体の手入れ、馬糧の受け取り等々。いつも駆け足だ。馬の健康管理は最も大事。馬具の手入れ点検もある。朝初めに馬に水を飲ます際に、馬の首に手をやり水の量を見る。飲む量が少ないと塩を少し混ぜるとよく飲む。それでも駄目なら上へ報告し、最後は獣医が来る。

疝痛になると、湯を沸かして布に湯をひたしながら

腹をこすり、毛布を腹に巻いてやる。屁が出ると一応やれやれと安心する。また鞍傷が出るとその兵はしぼられる。不注意だからだ。練兵休、病馬廠行きといろいろとある。少しも目が離せない。「お前たちは一錢五厘で幾らでも代わりがあるが、馬は陛下よりの兵器だ。十分注意せよ」と常々戒められる。

馬にもいろいろと癖がある。噛む、蹴る、その他いろいろ。私の「北風号」は整列すると、後ずさりして皆に迷惑をかけるので最後尾に並ぶことになった。また突撃のため軍刀を抜いて前に出すと馬は止まらない。二〜三キロ走ってやつと止まる。他の者の姿は見えないのは度々のこと。それでも上等兵に進級する頃（十八年十二月一日―入隊後約一年）には、だんだんと懐いてくれる。かわいくなつて羊羹でもあると食べさせてやる。また古兵にしぼられるとその古兵の馬にお返しをする。悪い事だ。

乗馬訓練では「飛び乗り飛び降り三回」と号令が出る。上手に早く成功すれば、早く馬を終えて班へ帰る別の仕事をしたり、食事をしたたり、一応ゆつたりする

ことができる。兵の中には三回上手にできなくて、いつまでも苦しんでいる者もいた。そのうちに足腰が疲れて、もう動けなくなり食事もろくにすることができない。特に、冬季に防寒の衣服や防寒長靴を着用すると重たいので尚更できない。それでも若い体力と気力で私はどうにかできた。

昭和十九年三月ハルビン出發、新しい警備地富拉爾基へ移動し、連隊本部中隊の藤堂隊へ編入される。こゝ富拉爾基（フラジキ）はその昔、日露戦争の当時、日探の沖禎介が監禁されたと言う地下室があり、零下四〇度にも冷え込む所。先人の不屈の闘魂に敬意と驚嘆の念一入である。

昭和十九年六月臨時編制下令（大陸命第一三三七号）、七月富拉爾基出發、人も馬も同居の貨車輸送。一両の貨車に馬四頭くらいを入れ、人は馬の頭の方の床上に寝ることになった。馬は立ったままで眠る。人を踏むことはない。何しろ滿州の僻地のこととて寝蓐その他一切の資材等不足である。途中大規模な駅に停

車すると、馬にまず第一に水をやる。馬糧、食料の分配。目の回る忙しさ。列車が動き出すと狭いけど馬の頭の下へ座りこんでやれやれと休める。内務班の中と異なり、古兵もいない貨車の中、のびのびと暮らせる。軍隊生活期間内で最も気楽に過ごせた約一週間であった。

釜山へ着く。輸送船は人のみで馬は積めない。ここへ置いていけとの命令。別れるのは淋しい。約一年半苦業を共にした「北風号」。何とか元気でいてくれと祈って別れた。馬は新しい任地にいるので、馬具は一切持つて行けとのこと。馬具を担いで狭い船内に入る。畳一枚に六名の割の過密度である。それでも妙なもの、何とか寝起きを続けた。

蚕棚なので頭が天井へつかえる。船室内は高温、高湿、換気不十分。といって甲板へ出ることは原則として禁止。馬と一緒に貨車の方がなつかしい。飲料水は一人一日水筒一個分だけ。それでも官給品の羊羹や飴玉が下給されて大喜び。

船はどこへ行くのか？ 海上の安全は？ 結局船団

はバラバラに分かれて、約一カ月して沖繩の宮古島平良港へ上陸した。途中で下関や鹿児島へ寄港したり、エンジンの不調とか敵潜の待避とか。でもよく海没せず上陸できたものよと、武運の長久を喜び感謝した。食事は上船するまでの陸上ではずーっと三食であったが、船内では二食に減らされた。国内の食料事情の悪化が感ぜられ、先行きの心細さが気味悪い。

幸い沈められずに上陸できた。しかし、馬のない騎兵はあわれである。馬具を担いで歩く。軍刀が邪魔になる。島には予定の二倍以上の兵力が上陸したそうだ。南方まで行けなくて途中の島へ上がった。釜山と一緒に出た他の船は、一切不明。不案内な道を通り疲れ切つて小部落へ。民家へ十五人程度で分宿、便所へ行く。と下で豚が待つており人の糞を食べる。この豚の肉を食べるのかと、気分が悪くなる。世の中というものは、いろいろと不可解なことが多い。

上陸して私は通信へ移つたが、音痴のためモールス信号は、送信は可でも聞く方は全く駄目。教官は一人に一人くらいの音痴だろうと処置なし。折よく騎兵

隊にも鳩通信班が新しく出来ることになった。隊長は渡りに舟と鳩班長教育に初年兵と共に派遣してくれた。豊第五六五三部隊へ十一月四日出発、十二月二十三日原隊復帰。

翌日から鳩舎の壕を独りで掘り始める。作業の合間に鳩の世話も欠かせない。近所の十歳くらいの子供が遊びに来る。何日か過ぎて「兵隊さん、平良の町（人口一万人はないだろう）は東京よりは大きいだろう」とかわいい。その中に子供の親が芋や芋餅など持って来てくれ始めた。有り難くいただく。

（鳩について）

鳩は放すと元の所へ帰る習性がある。馴らすまで鳩舎より出さないで網の中へ入れておく。付近の地形を覚えさせる。一個のケースに四十羽くらい入れる。餌はエンドウ、玄米、粟、野菜の刻んだもの、水などを与える。

訓練は空腹時にする。満腹時には他所へ行って遊ぶ。または野鳩になってしまう。飛ばす距離は七〜八キロ。

五〜六分で戻る。島から島へと距離を伸ばす。能力により百キロくらいまで伸ばす。舎内へ入ると人の頭、肩、腕へ止まり嘴でつつく。馴れると馬も鳩もかわいものだ。

鳩班は班長（私）と兵二人。私は兵長になっている。毎日訓練、世話を続ける。ポツポツと空襲が始まる。沖繩本島への行き帰りに残弾を土産代わりにお見舞いしてくれる。何の報復、攻撃もない。されつばなし。ついに鳩舎も危険となり約四キロの山の中へ移転の命がくる。

通信用具は足へアルミの筒（通信筒）をつける。長さ約二センチ、径一センチ未満の小さな軽いもの。通信文を丸く巻いて納める。

写真とか地図になると鳩の腹へ袋（薄い布地を背中で止める）を巻きつけて使う。司令部と部隊の間四〜五キロをよく飛ばした。訓練のみで実戦はなかった。馬には名前があるが鳩にはない。鳩の足に小さいアルミ板を巻く。その板には記号番号がある。所属部隊、その他が識別できる。

部隊の食料事情も悪くなる。朝食は五十人分として米を飯盒三杯分でお粥にする。昼食は芋二本。夕食はやつと飯。腹のたしには程遠い。空腹で歩行がやつとのこと。新しい鳩舎の移転はなかなか捗らない。体力の低下に伴い恐ろしいマラリアが出てきた。四〇度以上の熱発で薬も食物もない。名譽の戦死でなくて、マラリアの空腹の病死。死ぬ人数が多くなった。

そこへ加えて敵の艦砲射撃が始まる。その弾丸はどこからくるのか不明。始末が悪い。だれが死んでもよくないが、特に妻子のある年上の召集兵の死は何ともいえない。彼らの元気な頃には、よくポケットから家族の写真を取り出しては見せてくれたものだ。一日千秋の思いで無事帰還を待ちのぞむ愛する家族を残して南の小島で瘡せ衰え、敵の艦砲射撃、空襲、マラリア、伝染病で人知れず死ぬ。私も若い現役兵も無情と悲惨に人のことではない、苦勞を分け合った戦友の死を軍隊生活の中の最も忌まわしい思い出として今なお鮮烈に思い起こす。

敵の沖繩戦が進むほどに、宮古島の私もその影

響が甚大となり損害も拡大していく。私も擦り傷だが左手の上膊部に艦砲弾の破片を受けた。大事に至らなくて良かった。

宮古島に敵の上陸のないままに月日は流れ、沖繩本島はついに陥落した。痛ましいことに軍官民一体老幼男女の別なく激烈な抵抗の末、全島焦土と化し敵に多大の損害を与え、陸海空三位一体の特攻もその甲斐なく、無念にも敵の完全占領となった。

戦後五十年余りを経た平成の現在、沖繩を訪れて見れば、戦災の復興は着々と進み平和の恩恵に浴しているもの、広大な米軍基地は依然として現存している。島内の各所に玉砕の記念碑や遺跡が整備保存されている。戦跡を訪ねる数多くの人々の涙を誘い香華が絶えない。〇〇島の塔、健児の塔、ひめゆりの塔などは日本人ならば生涯に必ずお参りをしなければならない場所である。

沖繩陥落後は宮古島の敵情もしばしばの小康を保った。今後どうなるのか。八月十五日となった。「全員

集合せよ」玉音放送だ。ラジオは雑音がひどくてお言葉の内容が分からない。ただ「耐え難きを耐え忍び難きを忍び」のお言葉だけようやく分かったのみ。最後まで徹底抗戦せよとのことだろうと皆ガヤガヤと推測する。正午の放送の時点ではだれ一人として無条件降伏なんて考えた者はいなかった。

夕方になって上級者より「無条件降伏」と説明があり、「部隊は今までどおり軍紀を厳に保ち、今後も絶対皇軍の軍人精神にもとらぬよう、命令を忠実に実行せよ」とのこと。神州不滅、帝国軍隊の不敗を信じた我々は夢見る心地で何が何だか分からない。唯一はつきりと記憶に残っているのは、その日の夕食は飯を腹いっぱい食わせてくれたことくらいである。

昭和二十年十月、日本へ帰る船が来たと喜んで船に乗る。翌日下船の命令。沖繩へ上陸。日本ではない。四列縦隊で行進そのまま鉄条網の中へ。四隅に望楼、米兵が銃をもち立哨している。その時初めて敗戦がしみじみと分かった。背中に「PW」と書いた米服を着

た人々が天幕の所にいる。労働賠償のため働かされているとのこと。我が部隊もその日から「PW」の服を着る。起床点呼アメリカ式のパンと缶詰。鉄条網の出入口に集まる。

黒人兵は二十人ぐらいまでなら数えられるが、それ以上〇十〇百となると何度も何度も繰り返して時間がかかる。いやになるやら、馬鹿らしくなるやら、やつとトラックに乗る。私の行った所は兵器庫。沢山の自動車、砲、銃その他いろいろの兵器があるわ、あるわ山のように野積みしてある。日本とはもう桁違いの豊富な物量。これじゃ大和魂をもってしても勝てないと痛切に認識させられた。

黒人兵に監視されながら一年有余。順次に慣れてくる。中には米軍の兵舎掃除に行つたとき、シーツを持ち帰り、富士山や芸者の絵を描いて、タバコと交換してくる者がいる。時々は糧秣庫へ行っている仲間が、輸送途中のトラックから鉄条網ごしに缶詰やチョコレートなどを投げ入れてくれる。毎日の生活は夢か現か生か死か。

ある時、沖繩水上特攻の戦艦「大和」を攻撃する米軍の実写を見せられた。米軍の戦闘機、雷撃機、爆撃機延べ二、〇〇〇機にやられ、「大和」の甲板には何もなくなり、平らになっていた。航行していた最後は数多くの魚雷で沈んでいく。驚くばかりである。

昭和二十一年十月、帰国出来ることになり船に乗る。今度こそは本当に日本だ。名古屋港着。検査がいろいろあり、二〇〇円の金を支給される。泊まっている宿へリングを売りにくる。二〇〇円を出すとリング四個か五個くれた。日本へ帰った味がした。乾パンと自宅までの切符をもらい名古屋駅から満員の汽車に乗る。大きな荷物を背中に背負って買い出しの人が沢山いる。これが日本の姿なのか。途中何もなくてか伊予西条駅に着く。名古屋はもちろんのこと、途中、車窓から見た戦災都市の惨状とは異なり、西条は昔ながらの町、でも狭くて小さく汚い感じがした。九年前に勇んで出た西条とは大分違う。

自宅へ帰り着く。父や姉がびつくりしながら喜んで

くれた。床の間には私の写真を飾り、茶碗に御飯を盛ってある。家族の有り難さをしみじみ感じた。開拓義勇軍として満州へ渡り九年。夢の中に終わる。これで私の終戦となった（時に昭和二十一年十月十日ころと思う）。

復員後はしばらく自宅で休養する。体も心も平常になり上京、新聞記者の兄の世話になる。その中、衆議院の選挙があり広島県の谷川のぼる先生の陣営で手伝う。幸い当選。ところが、先生はその夜頓死。一切はご破算。また上京して職業も転々。住所も不定。最後は新居浜市の〇〇鉄工所で定年を迎えた。

結婚は昭和二十三年のこと。二人とも元気で現在に至る。女男女と三児に恵まれ孫は三人。現在のご隠居さん。かつては地域職域のお世話に励んだこともある。